近代農業改良を推進

丹後 千代太郎

安政2年（1855年）柴橋村生まれ

幕末からの大変動の渦中にあった明治新政府は国家経済や財政を立て直すため、地租を増大しようと図り、西洋の農業技術を採り入れる政策を実施します。新潟県でも農事改良が推進されますが、このとき中条地域で積極的に農事改良を進めたのが丹後千代太郎でした。

安政2年（1855年）柴橋村の組頭で奉公人5、6人を使う農家に生まれた丹後千代太郎は、地租改正に際して当事県が押し付けた実収よりも多い収穫高に「到底農家は立ちゆかなくなるであろう」と思いました。それを克服するために、農事改良によって実収を上げて国の課す負担に耐え、農家経営を維持しようと考えます。

丹後は江戸時代以来の農書を読みあさり、近隣農家に聞いて様々な実験を繰り返し、より優秀な種籾を確保、より優良な品種を選ぶために日々検討しました。明治18年（1885年）には北蒲原郡に開設された農事試験所を任され、田畑では稲作のほかに、郡から支給されたアメリカやフランスの野菜なども栽培しました。

明治20年（1887年）には牛馬耕の実況を学ぶために富山・石川県におもむき、犂（すき）や、種籾を購入し、柴橋村や乙村で馬耕の実施指導をしています。

自宅では農談会を開催して、乾田での馬耕や稲の品種改良を奨励し、農事改良の組織化を進め、中条町・本条村・柴橋村・築地村の4カ村で米穀改良組合を組織しました。この丹後千代太郎の努力は、明治後期の国・県による本格的な農業技術の改良を実現する基盤となりました。